

々はブッシュを無我夢中でよじ登った。尾根に出たとき、ガスが れて宮の浦のピーク、永田岳の岩峰が見える。やっと周囲一面のエビのシッポで光る屋久笹の美しくしさをゆっくりとおちついて見る事が出来た。パンを食い出発。時々左方に宮の浦のピークがガスの切れ目よりながめられる。永田岳より宮の浦河へ出ている小さな尾根をこえて腹面を巻く様にコルへ急ぐ。永田岳ピーク直下に着いた時、下方にエビのシッポの一面白く光る笹の中に黄色いテントが我々の目に痛い様にうつる。我々は声を合せてコールした。心浮き浮きしてコルに黄色く光る冬テントを眼下に見おろしながら声を上げながら下る。和田さん、増瀬さん、三戸、三浦の顔がみえる。感激の対面6日ぶりだ。私は顔のこわばるのをおさえるべく努力しなければならなかった。午後4時10分、グッショリ濡れた体をウインパーテントにもぐりこんだ時、私の生きている事の喜びを今さらの様に感じた物だった。夜BCのコルの空は星が一杯輝やき、我々の北尾根成功を祝福するかの様だった。

## 2 利尻岳東稜および南稜（1966年3月の記録）三 浦 嘉 孝

2度に渡る知床半島や屋久島と、毎年春になるとなにか逃げるように最果ての静かな山を求めてきた。そして今年も利尻岳に遠征が決った。メンバー的には、必ずしも十分とは言えなかったが、OBの参加もあり、とにかくやってみることにした。計画が具体化するにつれ、トレーニングも急ピッチで進められて行った。そして失敗には終ったが、その年の冬の北鎌尾根での苦闘が、大きな自信ともなった。目標は東稜と南稜だったが、結果は東稜のみに終った。後期の試験も終り、あわただしい準備の未、遠征気分で大阪を発ったのは3月8日の早朝であった。

3月10日 重く雲の垂下がった鬼脇港へ着いたときは、長い汽車旅と船酔のため足がふらついていた。さっそく連絡しておいた工藤松太郎氏宅へ向うと、快くわれわれを向えてくださったうえ、倉庫の2階まで拝借させていだいた。寒気は厳しいが、格好のBHとなりそうだ。午後から食糧、装備

を整理し明日よりの活動にそなえる。夜工藤氏より、いろいろ話を伺った結果、今年は積雪が多く、南稜は考えていた以上に困難な山であるということを確認し、行動を慎重に協議する。シュラフにもぐってからも、不安と期待の中でいろいろ思いを巡らす、長旅の疲れのためいつしか深い眠りにおちいってしまった。

11日 いよいよ東稜の始りだ。今日は素晴らしい天気で利尻の荘厳たる山容が、まるで城壁のように目前にそびえ建っている。この上天気をのがすことはないと思い、当初の計画を変更し、全員で本日中にアドバンスキャンプを置くべく全荷物を上げる。役場の裏から夏道通しに進むが、森林帯に少し入った所まで、人がかなり通った跡がありワッパも沈まない。それからスキューのシュブールがありそれを辿って行く。ヤムナイ沢を渡り、東稜に取付いたあたりから森林帯も終り風もだんだん吹き出してくる。前方に見える2つのピークを目指して登るが、なかなかピッチがあがらない。アタックの時を考えてできるだけACを上置きたいが、1つ目のピークを越えるとヤムナイ沢からの風は、どうかするとわれわれを飛ばさんばかりに吹きまくっているし、尾根もここより痩せてくるので、これ以上テントを上げるのは無理とし、急な斜面に2つのテントを張る。

ここはおよそ880m地点と推定できるので、計画の700mよりかなり上なので、ここより1日で頂上往復することにする。

12日、13日 風強くガスのためまるで何も見えない。停帯。

14日 今日は残された最後のアタック日だ。昨夜の満天の星に期待していた今日の天気も風こそ弱い、小雪がちらつきもう一つはっきりしない。6時35分、藤原、三浦の2名アタックに向う。1400mぐらいまでは風もなく、視界もいくぶんよく、クラストした斜面にアイゼンがきしみ、快適な登高を続けるが、ここから上は、ガスも濃く、新雪が積りだんだん悪くな

ってくる。尾根が南東に曲る地点より、ナイフリッジとなり、雪庇の出ているヤムナイ沢側は、無気味に切れ落ちている。新雪を払い除け、慎重に一步一步進むが、ガスと雪のため、足下さえ見えなくなってくる。しかたなく、ピーク直下と思われる1600地点で1時間半ほど待機しガスの切れるのを待っていたが、一向によくならないうえに風さえ強くなってきたので退却と決める。ピークを目前に下るということは、なかなか決心がつかなかったが、南稜より必ずピークに立つんだと言いきかせ、さらに強くなってきた風に悩まされA.C.に下る。

15日 テントを徹収し、B.H.に下る。明日からの南稜に備えて装備、食糧の点検を行なう。

16日 いよいよ南稜の開始だ。薄曇りの中を5名で荷上げを行なう。720m地点にほとんどの食糧、ザイル、登攀用具をデボする。帰りは急な斜面を見つけ、グリセードを楽しんだり、新人は滑落停止の練習に一時を過ごす。

17日 昨日からの雪は、かなりの雪積量になっている。鉛色の空からは大粒の雪がたえまなく舞い落ち、全員の気持ちもう一つはっきりしない。思い切って本日は休息日とし、気分一新明日から頑張ることにする。

18日 ラッセルに苦しみデボ地点に着くが、あたりの様子が一変しまるで判らない。背丈よりも高い木の下に埋めたのが、その木さえ一日で完全に隠れてしまっている。想像を絶する積雪量だ。そのおかげで掘り出しにかなりの時間を費やされ、予定の1000m地点までB.C.を上げることができず、720m地点にB.C.を建設する。

19日 風雪激しく一日中ラッセルに追われる。夕方より風向きが変ると、今度はテントを飛ばされまいと全員必死でポールにしがみつかねばならない。

雪と風との戦いの1日であった。

20日 何か静かだと思って目を覚すと、テントはほとんど埋っている。テントの中を雪だらけにし、やっとの思いで外に出るが、昨日にもましての風雪だ。ラッセルをすませテントの中に入っても、見ている間にテントの廻りが暗くなって行く。2、3回したがあきらめ唯も出なくなった。風向きが変わると一瞬のうちに雪は飛ばされてしまうが、次はクラストした雪板が風にはがされテントに飛び当たってくるので、テントを破られはしないかと気が気ではない。不安と焦りの一日であった。

21日 9時頃より風がおさまりだしたので急いで行動に移る。2日間の停帯のため、ルート工作を省き、一気にA.C建設に取りかかるが、1200m地点を過ぎ尾根が急にやせだすあたりから、雪の状態が非常に悪くなり、空荷でもまともに通れない様子なので、大槍下までA.C.を上げるのは無理と判断し、やむなく1200m地点の台地にA.C.を帳る。中野氏、杉本を残しB.C.に下る。恐らくここからは1日で頂上往復は無理かもしれない。唯も口にこそ出さないが、この時点でわれわれの敗北を悟ってるにちがいない。B.C.に向う足取も重く、何度もふり返り迎え見るが、南稜はノコギリのような姿を醜く、そして美しくさらけ出しているだけである。「とにかくやれるところまでやろう」と言った2名のアタック隊の言葉がいつまでも忘れられない。

22日 素晴らしい天気だ。7時半アタック隊出発。トランシーバより刻々状況が伝ってくる。予想以上に難行している様子だ。16時30分大槍通過、アタック隊はここでビバークし、明日頂上に向うと言ってきたが、16時の天気図より2つの低気圧の接近を知り、アタック中止を告げる。

この天気も今日1日で、明日からは再び風雪の世界に戻りそうだ。ビバークは避けねばならない。メンバーの都合で短縮せざるをえなかった日数、あ

まりにも悪かった雪の状態、研究不足、荒天、原因はいろいろあるかも知れないがとにかくわれわれは敗れたのだ。やるだけのことはやったのだと、いくら自分に言い聞かせても納得できない。天気図に示された2つの低気圧が無性に腹立たしい。あと1日晴天があれば、いやひっとするとこの好天は明日も続くかも知れないと思わずにはいられずアタック隊が下降に移ってから青空に光る頂をいつまでも眺めていた。

(2 頂) 二 登 本 山 12

23日 風雪の中A.C、B.C.を撤収し一気に鬼脇に下る。できればもう一度アタックを出したいと思ったが、日数を考え、その間に2日間の晴天をつかむことは絶望的だった。こうして南稜は終わったが、大倉を越えたことは以後再度の計画の時のよい資料と自信を与えてくれた。

24日 どうしても頂上へというわれわれの闘志は再び東稜へと向わせた。

本日は休養をかね、食糧、装備の点検をする。

帯 巻 日 21

25日 風雪の中8時過B.H.を出発。腰までのラッセルに苦勞し結局300

m地点までしか行けずことをC<sub>1</sub>とする。

08:01 ~ 00:11 m0061 62:8

26日 ガス濃く全く視界きかず停滞。

04:41 00:0 日 21

27日 絶好のアタック日だ。6時かなり低いC<sub>1</sub>を出発する。ラッセルは深いが皆の気分は明かるい。久し振りに山の楽しみを十分味わえそうだ。カメラのシャッターもフル回転だ。しかしすぐガスが出て来て白一色の世界になるが、荒れる様子もなくどんどん先を急ぐ。時折ガスの切目から頂上や大檐が薄く浮び出て来る姿はなんとも言えないくらい美しい。登るにつれガスも切れ眼下に雲海が広がってくる。問題となる箇所もなく快適な登頂が続けられる。本峰直下40mの壁にすこし手こずるが13時45分ついに頂上に立つ。

こうして一応東稜より登頂は果せたが、南稜の失敗という点でわれわれに大きな課題が残された。私としても、また技研としても何時かかたづけねばならない問題であるが、何故か利尻は遠過ぎるのように思いながら長い帰阪の途についた。

#### メンバー

C L 三 浦 嘉 孝 (商 3)

S L 杉 本 建 二 (商 2)

藤 原 聡 (工 1)

宮 本 義 海 (文 1)

太 田 英 雄 (商 1)

O B 中 野 力

#### 時間記録

3月11日	8:00	B.H.発	14:30	88.0m地点着 (A.C.)
12日	停 帯			
13日	停 帯			
14日	6:35	A.C.発	7:05	岩峰(1000m)
	8:25	1300m	11:00~12:30	1600m地点
	14:40	A.C.着		
15日	9:00	A.C.発	11:15	B.H.着
16日	8:15	B.H.発	11:45	デボ地(720m)
	13:50	B.H.着		
17日	停 帯			
18日	8:00	B.H.発	10:15	ボン山
	12:10	600mピーク	13:15	デボ地(B.C.)
19日	停 帯			
20日	停 帯			
21日	11:15	B.C.発	13:15	A.C.

	14:50	B.C.着		
22日	7:30	アタック隊出発	9:30	最低コル
	9:30	大槍直下	16:30	大槍通過
	18:30	A.C.着		
23日	10:10	A.C.撤収	11:00	B.C.撤収
	13:45	B.H.着		
24日	停 帯			
25日	8:20	B.H.発	15:05	C <sub>1</sub> 着(300m)
26日	停 帯			
27日	6:00	C <sub>1</sub> 出発	11:10	ピーク直下
	13:45	本峰頂上	17:40	C <sub>1</sub> 着
28日	9:00	C <sub>1</sub> 撤収	11:40	B.H.着

### 3 東北朝日岳西面（昭和44年8月）

四 方 立 夫

（三面川全域溯行）

私達が数年来活動の場として来た「黒部」を離れ、東北へ赴いた理由は、何にも増して「未知」への憧れであった。

北アを離れるに当り、多くの問題点があった。岩場が無い事、雪が少ない事、標高が2000mに満たないこと、我々にとって東北は「未知」であるが由に綿密な計画が立てられないこと、BC形式の溯行合宿に適した沢が少ないこと、等々の問題点が浮び上がって来た。しかし、それらを打破したものは、「探検」の原動力である「未知への憧れ」であり、同時にそこからの展望もあった。そういう夢と抱負を胸に秘め、7月29日出発した。が、大きな災害をもたらした北陸豪雨をもろに受け、8月9日まで濡物とカビの停滞が続いた。その間に沢の下部偵察、荷上げ、ルンゼ溯行等をし、又OB中野氏に入山して載き、やっと翌10日に行動開始した。

以下がその記録である。